

理論心理學に於ける意識の問題

上代晃

一 認識の論理の批判

N・ハルトマンが、その『存在論の基礎付け』に於て強調する如く、凡て認識は既に常に存在者を豫想するが、存在者は認識を豫想しない。しかも凡ての科學が何らかの意味に於て認識の體系である限り、この態度は又、科學そのものの態度でもなければならぬ。寔に認識問題に於て對象と存在者とを混同したことは、諛の意識理論——新カント派・實證主義・現象學派に共通の誤謬であつたと言えよう（七、二三頁）。科學の中に於て存在者の或るものが認識の對象へと轉化するのである。我々がここで問題にしようとする認識の論理は、この轉化の仕方を規定し且つ媒介するものなのである。即ち、或る存在者が如何様に我々の認識の對象として現われるかということとは専ら認識の論理に依存していると言える。この意味では實證主義者の言う様に、物理學に於て今日粒子と呼ばれるものも畢竟經驗的實體に外ならず、それは決して經驗の彼方の存在者そのものであるとは速断し難い。只、その際、我々が特に留意しなければならぬことは、實證主義の態度が容易に觀念論の立場に結びつくという點であつて、謂うところの經驗の内側でのみ操作や論理を問題とする様な、ハルトマンの謂わゆる反折的志向 (*intentiono obliqua*) の態度に陥る傾きがあるということである。經驗の成立が經驗の彼方の存在者、一般に「物自體」に基づくことは、凡ての經驗科學が基本的に想定していなければならぬ。後に論及するであろうところの論理的實證主義が徹底的に主觀的經驗のプロトコル命題から出發するということはよいとしても、論理を用いてなされる思考が單にその命題のトウトロギー的

變形にすぎず、經驗の外なる客觀的實在に迫る論理であることを最初から斷念して、何處までも經驗の内側にのみ留り居らうとする態度は、究極に於て觀念論の立場に外ならない。哲學の重要な課題が科學論理學となることであるということを認めるに吝かでないとしても、謂われるところの論理學とは、單なる思考技術に關する學ではなくて、例えて言えば、外部世界の一般的運動法則の認識たる範疇を取扱うもの（十七、三二五頁）でなければならぬ。その意味ではレーニンが物理學者の理論が我々の外部世界に我々から獨立して存在するところの物體・液體・氣體の反映であるとし、この反映が近似的ではあるが、それは「恣意的」ではないとする（十九、上、一〇六頁）のは首肯し得よう。只、問題は反映に際しての「恣意的」でない人間の認識の性癖に就いてである。

嘗てニュートンの絶對時間とユークリッドの絶對空間というものが考えられた時、そこに人間の認識の性癖が遺憾なく示された。由來、凡ての存在者が常にこの空間と時間の二契機から捉えられんとし、今日に於てもこれら二つの契機を脱した認識の論理に到ることが余程困難な事であるように見受けられる。物理學に於ける粒子と波動、生物學に於ける形態と機能、心理學に於ける肉體行動と意識、これら對になつた二つの概念こそは、單に人間の認識の論理が立てた契機的概念にすぎず、實在的世界・存在者の側に無關係に立てられたものに外ならない。従つてそれは真理の基準とすべき「存在と知性の一致」(adequatio rei et intellectus) に到るべき方途なのではない（二十九、三）論理主義的思惟の批判）。一般に、粒子・形態・肉體が所屬する空間の契機は常に不連續の概念を成立させ、凡ゆる意味での實體が導入され、それは又常に變化の擔い手であり運動の *Trigger* なる者に成立の機縁を與えるのである。「粒子が運動する」とか「私が歩く」とかいう場合の、主語となつて述語とならぬ者こそは常に空間的な認識の論理の契機から由來するものであつて、その様な命題は、認識の外なる外界實在の反映であるとしても、正しい意味で *adequatio* であると言ふことは出來ないのである。一方、變化それ自身を示し運動それ自體を窺わそうとするところの、何處までも述語となつて主語とならない形相は、常に認識の論理の時間的契機から成立するもので、單に連續

的であるにすぎない概念を成り立たせるものである。凡ゆる意味での二元論的契機が、ここに執拗に我々の認識の論理を構成していることを省察し得る以上、斯かる一種の論理主義を脱却して、客觀的實在の存在の論理そのものに迫ることが考えられねばならず、その意味では從來慣用している多くの概念に批判が加えられねばならぬであろう。ウィーン學團らの指示するプロトコル命題そのものが又この様な批判にさらされねばならぬであろう。單體問題に於てポープが粒子と波動(場)とが相補的であるというに對應して、人間の單體問題に於ける肉體と意識とが相補的であることが吟味されねばならぬ。粒子に於ける波動・場が變化の契機を示す如く、人間に於ても亦移動・行動へのモチイ・ペイションを意識が擔當しなければならぬ。粒子の波動性・場の性格が肉體の意識性で、心理學に於てもレヴィンの如く「場」の概念を導入することは示唆的であるとしても、その「場」の構造は従つて意識の構造によつて示されるものとなるのである(三十、(五)發生機意識の構造)。後に論及するであらう如く、學習論的に形成された意識が自己意識的・社會意識的に歴史性と社會性とを藏しているが故に、「場」が學習論的構造を持つのである。

認識者の認識の外なる客觀的實在の存在の様式が、斯くの如く、時間と空間、形相と質料、連続と不連続の相矛盾する契機を藏すると考えられるところから、謂わゆる辯證法的論理なるものが採り上げられるのであるが、併しものと實在世界それ自體は、右の様な相矛盾する契機を所有しているのではなくして、それらは單に何處までも人間の側に於ける認識の性癖にすぎないのであるから、實在世界そのものが矛盾の統一であるとは言い得ない。我々の認識が矛盾する契機を立てるが故に、そこから矛盾ということが言えて來るにすぎず、従つて辯證法的論理というものは、畢竟、二元論的な殘滓を留めているところの單なる認識の論理に外ならず、その様な論理の下では眞の *ambiguitas* を期待することは出來ないのである。我々は實在世界の存在構造に合致した概念を立てて、新しい論理に向うことを余儀なくされるのである。その様な努力の途中に於て、空間的・質料的な實體概念に對する嫌惡が先ず起り、たとえバベルグソンの『形而上學序論』に見られる如く、凡ての事物は生成の途上に在り、自己を維持しつつある状態は一つ

もなく、只變化しつゝある状態のみが存在する、凡ての實在は傾向であり持続である、というような考え方が採られる。物理學に於けるド・ブローイの物質波動説の如きも亦然りである。しかし、それは、逆に單に時間的・形相的に向つたにすぎず、却つて作用が實體化される結果となる。

唯物辯證法に於て採られる實在主義の立場、即ちN・ハルトマンの謂わゆる「眞直ぐの志向」(Intention recta)の態度は我々の是認するところであるが、對立物の相互滲透とか矛盾の統一とか謂われる辯證法的論理に就いては猶疑議なきを得ない。唯物辯證法に於ては、よく謂われる如く、量的變化が質的な一變を惹起するとされる。明らかに量に於て連續の契機が、又、質に於て不連續の契機が採擇されているに外ならない。量が時間的・形相的に、質が空間的・質料的に認識の論理主義的な性格を露わにしていると考えられる。レーニンはその『哲學ノート』に於て、辯證法が對象のものに潜む矛盾を研究するものであることを強調するが、しかし、我々は矛盾とされるものが實は人間の意識の本性に基くもので、反映の役割を果すとされる意識が反映に際して採る論理主義が無自覺のうちの一方向的に矛盾の概念を導入するのであつて、客觀的實在の世界はその様な論理主義の彼方に生成・發展しているということを論證しなければならぬ。

「Aが變化する」という時、明らかにAは變化の Trigger としての主語であるが、變化が持続的に行われる場合、そこには量的變化が存在するので質的な變化はないということになる。「Aの變化」ということが言われる限り、そこには質的同一が保たれている、「Bの變化」ということがらに移行するまでは量的な連續的變化とされる。主語であるAに於て空間的な實體が不連續的に導入されているが故に、この様な論理が成立して來るのである。唯物辯證法が「突然變異」を取扱う場合、この論理が見られる。謂われるところの「突然變異」を決定するマルクマールとしては、しかるに、單に空間的・形態學的に見られたメルクマールからなので、AからBへの飛躍という場合、單に形態學的、即ち空間的な不連續ということが採り上げられているに外ならないのである。それが機能的に不連続か連続か

という點は問題とならない。メンデリズムやモルガニズムの立場からの染色體地圖研究にあつても、一つの形質は一つのゲン（遺傳子）と對應的に考えられるが、形質の決定は殆んど、例えばドロソフイラの研究に見られる如く、形態學上のメルクマールに外ならない、即ち人間の認識の論理の性辭から立てられた空間的契機に外ならないのである。その上、ゲンの決定そのものも亦、よしそれが如何に微細に追求されたとしても、單に形態學的方向によるものにすぎず、ゲンの機能ということは問題とならない。一般にメンデリズム遺傳學の立場は、心理學に於ける要素主義の域に在るものと言うべく、一つの屬性が顯著な實在性を負わされて考究される。寧ろ、凡て屬性的なものは認識の論理から立てられたものにすぎず、實在の謂わば附帶的現象が抽出されたものに外ならない。謂わゆる全體主義の立場に立つ生物學は斯様な要素主義の説を批判する。全體的・定常的な「動的平衡」から生物を理解しようとするL・ベルタランフイーの立場からは、突然變異型に於いては只染色體上の一定部分だけが正常の個體と異つてゐるとは考えられないとし、染色體の變化は突然變異の生成に於いて主動的位置に立つてゐると見るよりも、寧ろ系全體の變化に附隨して現われるところの從屬的な現象であるとするのは當然で、ゲンの概念が許され得るとしてもそれは謂われる如き固定した物質ではなくて、細胞内の一定條件のもとはたらく物質間の特定な作用様式であると考えられる（二十、Ⅷ）。即ち、生物の全體的な作用様式そのものが遺傳性と考えられるので、明らかにメンデリズムの形態學主義に對する機能主義的な批判と言える。我々が後に論ずるところの生物の意欲性（意識性）から遺傳を考える立場は、全體主義が全體と呼ぶ性質を更に具體的に個性的に解析したものに外ならない。ゲンの形態學的特徴などは單に細胞のもつ力系的全體・力學的「場」の附隨現象だとする立場からは、唯物辯證法の量・質論に對して疑議が出るのは當然であろう。即ち、「量を産んだ、その量の背景にある全體的な場の内部相互關係によつて初めて質の飛躍が生じるのである。要素的に抜き出された量の變化が、それ自身で孤立して質の不連續を含むのではない」として質の飛躍をただ形式的に力説することの無意味さを指摘する（九、七突然變異學說）。その點に於ては、心理學に於

ても正常と異常や本質と變質がアリストテレス的な類理論 (class theory) からこそ區別され、不連続とされ得るのであつて、元型的 (genotypisch) に力系的全體の構造から見られる時には、その様な不連続的な區別は徹廢されるとするK・レヴィンの謂わゆる場理論 (field theory) の立場の主張 (十二) は是認されなければならぬ。只ここで注目し得ることはメンデルイズムが要素主義として全體主義から批判され、又、全體主義が辯證法的論理を批判する一方、唯物辯證法の遺傳學は明らかにメンデルイズムに對する不満を表明しているという事實である。この問題に就いては後にふれるであらう。

認識者の意識の外なる客觀的實在を認識することが一切の科學に課せられた課題であるにも拘らず、人間の認識の論理の性癖から、反映が様々に歪みを生ずる所以について我々は如上若干の實例を見たのである。認識と存在者との *adequatio* を證據立てる唯一の根據は決して單なる主觀的な「確信」ではなく、個々の實踐に於ける成功でなければならぬが、實在的世界そのものの構造が、オペリンらの示す如く、無機的物質から人間及び人間の社會に到るまで層位原理的・進化論的に連続していることは容易に想定される。そして客觀的實在の各層に對應する科學が、ここに諸物質科學、生物學、心理學、社會科學という様に成立する。意識の外に在る凡ゆる種類の異つた客觀的實在を對象とする諸科學は、夫々異つた概念によつてこそ初めて *adequatio* に到達し得べきことが考えられる。それ故、マッハ主義の統をひく「統一科學」(Einheitswissenschaft) が「統一語」(Einheitsprache) を熱心に探し求めるところことは、認識者の意識の外に各層位の客觀的實在の存在を想定しないところから起るもので、その態度こそ觀念論の態度に外ならない。

この様に客觀的實在の世界が連續的のものである限り、その存在の根本構造という點に於ては或る共通の特性が認められる筈であつて、この意味に於て、レーニンが「すべての物質が、その本質上、感覺に類する性質、反映するという性質を具えていると想定するのは論理的である」と述べている(十九、(上)、二四八頁)のは正しい。粒子と波動、

形態學的肉體と意識（感覺）という風に論理的契機を指摘した立場からして、この物質に於ける反映面が波動性・場性格にあることは容易に認容される。粒子や肉體の如き空間的、質料的契機が不連続的・不變化の實體であつたに對して、意識面・反映面の如き連続的・時間的契機が變化を媒介する契機であることは再び指摘されるに値するであらう。しかるに我々は、この様な二元論の殘滓を留めている論理主義を脱するためには、實在世界そのものの根本構造に *inadequatio* である様な根本概念の導入が必要となるということを眞に問題としたのである。試みに今、單體問題に於ける人間を問題とすれば、我々に於ける行動は反映面たる意識性（感覺性）を媒介として起される。この事は反射の如き分子的行動 (*molecular behavior*) にあつても目的行動の如き團塊的行動 (*molar behavior*) にあつても等しく言えよう。即ち、變化の擔い手であるところの肉體は意識性によつて「意欲」された行動を遂行するのであつて、實在はそれ自身で動くと考えられる契機を媒介として自轉するのである。凡そ「意味」というものは「意欲」の存するところに發生するのであるが、人間行動の場合に於ては、意欲するものとされたものが自己同一的なるが故に、「意味」が實在的となると考えられるのである。斯くして我々は、肉體と意識という實在の論理的契機を脱して、それら兩契機を兩つながらに包藏するところの實在概念として「意味」という概念を導入するのである（二十八）。「意欲」する者の契機として意識が、「意欲」される者の契機として肉體が、單體問題に於ける人間の存在契機として認識の論理から立てられるのであるが、その様な兩契機を兩つながらに包藏して、しかもその様な論理の彼岸に生成存在する「意味」なる實在について猶若干の検討が加えられねばならない。

W・ケーラーは、その『事實の世界に於ける價值の位置』に於て（十一）、力系的全體のプレグナンツ性即ち力學的方向の法則に支配されて生ずる事實の世界に於ても、そこに「要求された性質」(*requinohens*)がある以上、自然も單なる「事實」ではなくてそれは同時に亦「當爲」でなければならぬとし、價值に就いて一つの關係理論的價值觀を示している。斯様な立場からは、要求性としての價值の實在性が事實の實在性に相即して認められているわけで、

人間の世界たると物質の世界たるとを問はず、凡ゆる刻々の事實の世界が又同時に刻々に價値的でもあり得よう。K・コフカも、價値は存在と無關係でなく、存在の中にあり、存在と共に客觀的のもので、凡ゆる過程が意味を持ち、人格であることは意味を發揮して價値を完成することであると言う（十）。事實がその様に過程し且つ結果するより外にあり様がない事情が力系的全體性として示される以上、それは、事實が一つのテロス（目標）を希求していることを認めるわけで、價値や意味が事實と共に實在的となると考えられるのは、畢竟このテロスに基くものと断ぜられるであらう。我々の立場は、人間にあつての意識性の契機——意欲するものとしての契機——が環境と共に體面的に學習論的に形成され、その様に形成された具體的な意欲性から具體的な刺激（環境）との出会いに際して具體的な反應（行動）が起るとするもので、その様な經驗主義的な内在目的性から行動という事實が「意味」として實在的となると考へるのである。謂わば「獲得形質」——それは單に形態學的・空間的に考へられたものであつてはならない——に依存して内在目的の意欲性の方向が既定のテロス——ブレクナツの如き——に拘束されないが故に、ベルグソンの謂わゆる純粹・持續的に創造的・進化的に實在としての「意味」が *inner Novos* と考へられるのである。單體問題として一人の人間の生存が實在する「意味」と考へられたのであるが、それは意識の契機から肉體の行動が内在目的的に、即ち意欲するものとされたものとの自己同一として、惹起したからであつて、多體問題として人間が考へられる場合は、反映する性質と意欲する性質とを併せ持つこの意識が社會意識化している状態を採り上げることによつて問題とすることが出来るのである。形相的・時間的契機からしてこの様に質料的・空間的契機の變化が惹起する構造は、單に人間や生物の行動の構造であるばかりでなく、同時に又それは物質のもつ變化の構造でもなければならぬといふことは、物質にあつても感覺に類する反映する性質を認めることは論理的であるとするレーニンの暗示を俟つまでもない。して見れば、ケーラーが物理的事實の世界にも價値が考へられ得るとするのと同じ筆法で、我々は「事實の世界に於ける意味の位置」を言うことが許され得よう。物質のもつ反映面、言い換えれば單

體問題として考えられる場合の粒子のもつ波動性は明らかに意欲の形式をもつたものと考えることが出来るのである。

斯様に實在的事實の世界を同時に「意味」の世界として考える立場にあつては、全體性や力系性がアプリアリの性質と考えられるに反して、何處までも意欲が獲得形質として、經驗の果てに學習論的に形成されたものとして考えられるので、ここに後に述べる如く「場」の學習論的構造ということが問題とされ得る必然性があるのであり、單なる全體を文脈として規定し、實存のもつ歴史性を府位原理的に理解しようとする立場が生れるのである。斯くして我々是我々の認識の論理から立てられる二元論的契機を越えた彼岸に「意味」なる實在的世界が想定されるということを指摘すると共に、我々の認識の論理そのものが實在の構造に對して常に *adequatio* を保つ如く、新しい論理に立ち向わなければならないと思うのである。そうした論理への第一歩として「意味」概念を導入したのである。

二 意識の生物學的機能

「動的平衡」という一種の全體主義的原理を考える理論生物學の立場からは、細胞の様な全體性そのものが形質の決定因となるもので、一つのゲンが或る一つの（形態學的）形質の擔い手であるとするメンデルズムを否定することは甚にふれた。又、生體の内部相互關係的な力系的全體性から遺傳の問題を取扱う立場もやはりその全體主義という點でメンデルズムの染色體遺傳子説に對しては否定的立場を採るのみならず、恰も心理學に於て力系的全體主義學説が要素主義を超越して登場したと同じ意味に於て、その様な遺傳學を「古い遺傳學」の範疇に入れるのである（八）。我々は全體主義が様々な様式で「全體」と考えるものを更に具體的に考えて「意味」の概念を得たのであるが、「意味」の立場からすれば、生體の意味性が全體性に替つて重要性をもつて來るのである。然るに、この意味性は變化の契機として意欲的意識というものを持つものであるが故に、生體の意欲性ということが全體的なものを超え

て更に具體的に生體のもつ全體を包括すると言ふことが出来る様になるのである。従つて遺傳にあつても亦生體の全體性——特に物理化學的な術語で述べられる——というのは猶抽象的で、更に具體的に生體の「意欲性」——反映作用を最も素朴なものとしてもつ、「意味」の意識的契機——の問題が採りあげらるべきものとされるのである。然も、人間にあつては特に顯著に、この意欲性は多分に獲得質の性格をもつものであつて見れば、人間遺傳學にあつて、この様な單なる全體性という如きものを超えた、より包括的・具體的な全體性たる意味性が問題とされないわけにはいかぬであらう。ところで、我々の問題とする「意味」の意識的契機というのは、常に環境（刺激・「物自體」）と共範的に學習論的に形成されたもので、先驗論理的所與の如きものでは更になく、従つてそれは徹底的な、「case-study」によつてのみ把握され得るものである。後述に於て、「場」が學習論的構造をもつことが強調される如く、よし生體と環境とを兩つながらにひつくるめた全體が考えられても、その様な全體が或る特有の仕方での様に過程し且つ結果するより外にあり様がない事情と考えられるプレグナンツ即ち終極的な均衡的安定状態は具體的には學習論的に形成された意欲としての意識から規定され且つそれに相對的であると言えるのである。でなければその様なプレグナンツは内容の空虚な、アプリアリの性質をもつたテロスに外ならない。

實在の形相的・時間的契機は變化を媒介するのである。O・ハルの謂わゆるネオ・ビヘイヴィオリズムに於ては、パヴロフ流の刺激—反應（S—R）の公式を不満とし、刺激—有機體—反應（S—O—R）の圖式が考えられて、有機體にあつてのモティベーションが刺激と反應の間に介在するとされる。我々が行動が意欲としての意識によつて媒介されるとしたのも結局は同一の理由からで、我々にあつてはそれ故、刺激—意識—反應（S—C—R）が圖式化される。社會的行動の生起の場合はCは社會意識であるに外ならない。斯様な圖式の下に刻々に「意味」が實在となるのである。E・C・トールマンの方程式 $B=f(S, H, T, P)$ に於ける媒介概念の總體は有機體に於て見られる「意味」的

なもので、刺戟―反應の間に介在せしめらるべきものである。後にふれるウィーン學團のカルナプらの物理主義的方法に對してR・ドゥンケルが行動の觀察にあたつては意識というものを認めないわけにはいかないとして、我々が一定の狀況についてつくるところの「狀況像」が刺戟―反應の間に介在するとするの、意識の意欲的性質を言うのであろう。

一體、力系的全體性としての「場」のヴェクトルから行動の生起を考へるといふことは、本能やエンテレヒーから行動を説く行動理論をプリストテレス的として超廻したガリレオ的力學理論として優れた構想と言わねばならぬ。只、しかし「場」に於て大小幾つかの力系が更に分節的に考へられたとしても、それでは例えば人間の行動の場合にあつて、意識の生起なしに、刺戟と肉體とを包む「場」だけから力系的全體のプレグナンツに向つて行動が起つてもよい筈である。「場」の緊張の隨伴物として考へられる意識の生起などは餘計なゼイ物とされねばならぬ。AがBの知人となろうとしてCに紹介狀を貰いに行く行動を起す様な、謂わゆるホドロジカルな「場」に於ても、Aの行動の「場」のヴェクトルから單に行動だけが何故に起らないのであるか。何故に人間に意識面というものが出て來てゐるのであるか。我々には意識ぬきの謂わば無言劇が「場」の理論からしては期待されるのである。こうしたところから、「レヴィンの説明からも明らかである様に、心理學的力學は元來ガリレオ的近代力學の心理學への應用の結果である。従つて當然疑われることは、この心理學的力學は人間行爲の力學的面を明らかにする功績を擯い乍ら、同時に主體的行爲の物理學的否定を伴ひはしないかと云うことである。このことは力と意識の區別の中に著しく讀みとられる」という批評(二十一、二八〇頁―二八一頁)が提起されるのであろう。斯くして我々はこの様なところに謂わゆる「主體性」問題の解決の鍵があることを知ると共に、意識の生物學的意義と意識が生物進化に與つた機能とを、従つて又、意識と遺傳の關係の問題を考究しなければならなくなるのである。そうすることによつて我々は意識を「場」理論にあつての一種の隨伴現象論から救ふことが出来るであらう。「實存的人間の心理學」が強調される立場から、

「レヴィンの考想の中にも實存的な主體的人間の解體がある。彼が場の理論を提唱し、力學的把握を主張し、而もそれを實證的に證明してゆくところに敬意を表するものであるが、その強調する力學的全體或は力學的同質性——これが彼の把握の主對象として提示されるが——のうちに却つて主體的人間の解消、喪失が見出されるのである。場や力學性の主張によつて、却つて人間は形式的な普遍概念の中に見失われて了うのである」と評される(十三、一五頁)所以もあろう。人間の行動の場合の心理學的力學は、場の力による物質の運動の場合と趣を異にし、先ず「人」の領域に生まれる緊張から考えられ、人の内部領域に於ける「要求」に基くモテイベイションを通じて行動が開發されると説かれるが、何故に全體の「場」の緊張がモテイベイションを媒介とするのであるか、物質の運動と同じ様に、意識ぬきに即ちモテイベイションぬきに形態學的肉體の移動が何故起らないのであるか。そこに意識の根本問題が宿るのではない。

量子力學に於ては、單體問題として考えられる場合に、物質の存在構造は結局量子力學的「状態」としか考えられず、その把握の契機として人間の認識の論理の性癖からして粒子性と波動性(場)の二契機がボアの謂わゆる「相補的」に立てられて來るのであるが、我々がオパーリンらの説く如くに「生命の起源」を物質進化の歷程の果てに跡すけて行くならば、物質にも感覺に類する反映面を考え得るとするレーニンの洞察の如く、粒子の場性(波動性)がこの反映する性質に外ならず、且つそれは又人間の形態學的肉體のもつ意識面と進化の距離をへだてて對應することを知るのである。つまり粒子としての空間的肉體の波動性・場性を我々の意識が受けもつものと考えられる。それ故にこそ、よし「場」の概念を用いるにしても意識の構造が「場」の構造を示すものであつた(三十、伍)のである。物質に於ける反映性としての場性が人間にあつて意識性にまで變化した所以こそ、意識性の生物學的意義を物語るものではないのか、でなければ、意識の生物學的意義は誰と言うの外ないであらう。「辯證法的唯物論の新しい課題について」論ぜられる際、意識が只單に反映する性質を示すというだけの説明を不満足として「感情と意欲とをもつて存在

に反應する」ところの意識性が問題とされねばならぬとするのは(十四)、斯うした立場が變化・進化・發展ということを重要視するという點で、力系的全體主義や心理學的場の力學說などと立場を異にしていることを明白に物語るものと言つてよいであろう。謂わば肉體が意識を必要とし初めた所以を我々は知らねばならぬ。

W・マクドノーガルは或る意味でラマルクの遺傳を認めた上で次の如く言う、「肉體器官が先ず新しい形態と機能力を獲得し、その後、それらに適合した本能的傾向上の或る變化が起つて、それらを發動させるに到つて初めて働き出すのだとは考えられない。寧ろ凡そ形態乃至機能に新しい發達が起る場合、件の形態なり機能なりの特殊性を必要とする(有效な働きをなす上に)活動が抑々起つて來る第一歩は、種の本能性の變化なのだということを信ずることが肝要である。斯かる變容を前提して初めて我々は、如何にして自然淘汰なるものが今言つた様な變容された新しい本能的傾性に最も適合して役立つ肉體の形態と機能との特殊性の發達を種に於てもたらしたかを理解することが出来る(一十五、四八〇頁)と。我々は既に彼の本能理論——エンテレヒーと同様のホルメーを假定するところの——に従ふことは出来ないとしても、ここに本能性の變化から進化が考えられている點に興味をつたぐことが出来る。即ち、本能性の變化とは畢竟するに生物にあつての意欲性、變化に外ならぬからである。生物がその生存を保つ上には、一定の環境に對處して特有に反應し續けることを餘儀なくされるが、その様な一定環境に對する特有の反應行動を可能にするための生物側に於ける「意味」の在り方そのものに遺傳性が認められて來るので、マクドノーガルの「ラマルクの實驗」として知られている一連の實驗はそれの實證を試みたものである。被験動物たるネズミは代々に互つて、「明るい通路」を選んだ場合には衝撃を與えられ、「薄暗い通路」を選ぶ方が成功的である様に訓練せられる。十六。斯様にして訓練せられ學習した行動の仕方是一个の意欲的な「獲得形質」としての「意味」であると解釋されるが、四十四代目のネズミに於ての學習以前の行動(zero-day choice)を見ると、そこに明らかに「明るい通路」の忌避と「薄暗い通路」の積極的な選擇が現われている。斯うした現象の中に見られる遺傳性とは、單なる力系

的全體性といつた如きものを越えた、更に一層全體的な、歴史を背負つた「意味」そのものであることが知られるのである。「獲得形質」というものが單に形態學的のみ考えられ勝ちなメンデル・モルガン遺傳學の方法に對して、生物を「意味」から捉えようとする我々の立場からは、「獲得形質」ということが更に問題となるのである。

五・ベルクランフイーの如き「動的平衡」を考ふる立場も、力系的全體性の内部相互關係を考ふる立場も、ルイセンコ學說の如き遺傳的性質は生殖細胞全體によつてになわれものとする立場も、これら凡てに共通することがらは要素主義的なメンデル・モルガニズムを否定するといふことにあるが、就中これらの中の最後のものにあつては、生物に於ける「意味」的なるものが重視されていると思われれる點で關心がつかれる。ルイセンコにあつては、二十六、「ルイセンコ學說の發展」、遺傳性とは何よりも先ず、生體がその生活のために一定の條件を要求し、それぞれの條件に對して一定の反應をなす性質であるとされる。そして斯様な遺傳性はメンデル・モルガニズムにあつての如く不變的・固定的のものではなくて、遺傳的變化は環境條件の變化に適合した方向に起ることを主張する點で、「獲得形質」の遺傳が問題とされていることにならう。斯様な獲得形質としての遺傳性は外的條件に對する生體の要求性に外ならないとされることは、要するに生體の遺傳性というものを「意味」として考へているものと言ふことが出来るであらう。即ち、生體の「意欲」性が重視される理論であるとも言えよう。しかるに、我々の「意味」——その形相的契機こそ「意欲」としての意識である——は刺戟（環境）と共軌的に常に學習論的に形成されるものであつた如く、そこに意識の生物學的機能が問題とされる理論的根拠が考へられるのである。

三 「場」の學習論的構造

力系的全體としての「場」がブレグナンツを希求する事の論理がレヴィンに於けるトポロギー並にヴェクトル心理學の理論として説かれた。我々は上來屢、このブレグナンツがアブリオリの性格をもつと考へられると共に、その様

な論理に於て考えられたところのプレグナンツとは内容の空虚な一つのテロスであることを指摘した。それが證據に、凡ゆる場合の行動の「場」の結構を考える時、それは個々にしかも具體的には常に人間にあつての意識に對して相對的であるからであつて、プレグナンツが如何なるものであるかは、専ら個々の場合の意欲としての意識からしてのみ言えるのである。しかるに意欲としての意識性は刺戟と共軌的に學習論的に形成されるものであるが故に、「場」は常に學習論的構造をもつたものとなり、何處までもアポストリオリの性格のものとなるのである。そして、「場」がこの様にアポストリオリの性格をもつていゝことは、人間が未來に於て閉ざされていゝ進化的方向をもつといふことになるのである。何故ならば前述に於ける如く、凡そ遺傳性といふものは獲得形質としての「意味」に外ならなかつたが故である。

H・C・プロゼツトは、食物なしの迷路の中に無報酬の状態で置かれ暫時抑留されることを數度經驗したネズミが、今度食物の報酬のある迷路に入れられると、無報酬時の迷路についての經驗が何に到達する成功的行動の上に積極的な効果をもつて現われるといふことを、無報酬での迷路の經驗をもたないところの、最初から餌によつて迷路學習をしたネズミと比較して見て知つた。この様に異つた目的の下にあつての經驗が、別の目的をもつた行動の上に積極的な効果をもつといふことは、潜在的に學習が行われていたと見るべきだとし、これを「潜在學習」と呼んだことはよく知られた事實である。人間にあつてもこの様なことは日常遭遇するところであつて、書店を探して町を歩いた經驗が、別の目的でその町を急いで通りぬける必要の起つた時に、近道を獲得することを可能にする場合があるといふ様に積極的な効果を及ぼすのである。この様な場合には潜在學習の經驗はかなり明瞭な再生意識によつて伴われるであろうけれども、大抵の場合の瑣末な行動の場合には、何時何處でした經驗の効果が現在の行動の上に効果を現わしているのかといふことが再生意識されないのが普通である。この様なところから、その行動が何か當然と下つた天啓の様に思われて自らにも神祕的に思われることがあるのであり、又、アブリオリの性格の様にも思われるのであ

る。ゲシュルト學派の人達が學習について「洞察」とか「見通し」(Einsicht)とか呼んでいるのは實はこれに外ならないのである。我々は斯くして、「洞察」ということは何らかの意義での學習効果の轉移であるとすることが出来る(三十一)。その様に考えて来るならば、W・ケラーのよく知られた「類人猿の智慧試験」に於ける動物が洞察的な行動をする場合も、何らかの経験の効果が認められる筈で、只それが實驗者の認識に對して「Form」であるのであると言える。若しそうでない場合なら、即ち「獲得形質」としての「意欲」からでない場合ならば、それは遺傳性にもまでその効果の由来を辿らなければならぬが、我々が曩に論じた様に、凡そ個體をして行動を可能たらしめるところの遺傳性は又、種に於ける學習に基くものに外ならぬということは、獲得形質遺傳からして言えるのである。人間にあつても肉體諸器官の最低限度の働きなどはもとよりこれに屬するものである。その様に考えて来るならば、我々の行動の中には無から有が飛び出すが如きアプリアリの現象は一つもなく凡てがアポステリアリの糸によつてたぐられ得るものである。

我々がある課題場面に置かれた時、「洞察」的に解決の発案が生じたという場合には、力系的全體主義や「場」理論の立場からは、「場」がブレグナンツに向つたのであるとされる。しかし、その様なブレグナンツの内容を詳細に検討して見るならば、我々が既に述べた如く、経験を背負つた意欲としての意識から行動が起されていることを知るので、従つて「場」の構造は経験を背負つたところの意識に對して常に相對的となつて来るのである。假りに何もかもを包んだ「場」というものを考えても、それは逆に論理的に立てられたものとなるであらうし、その場合その場合で意識に對して相對的な「場」のブレグナンツを、一般的に安定への傾向とか均衡への復元とか呼んでも實は内容の空虚なテロスを置くにすぎない結果となるであらう。我々が問題としてゐる意識は環境の如何に拘らず獨存的に働くものでないことは既に指摘したところで、意識が経験を背負つてゐるということは畢竟、意識が必ず具體的な刺激(環境)と共に學的に學習論的に形成されるということなので、その様に環境を豫想するという意味では、ホルディン

の『生物學の哲學的基礎』やベルクランフイーの『理論生物學』に見られる全體論 (holism) や生體論 (organicism) の全體主義的主張と同一方向にあると言ふことが出來よう。心理學的に見るならば、意識がこの様に歴史的に環境との共輓性を背負つてゐるということ、換言すれば、「物自體」や他の人間達をひつくるめた外界との共輓性を所持しているということから、人間の「性格」という様なものが社會意識的に把えられ得る根據が出て來るのであり、レヴィンが「自制的行爲」(beherrschte Handlung)と呼んでゐる行動の場合も社會意識から考えられ得るのである。力系的全體としての「場」に於ける要求性 (requitendness) というものも、その内容は主體の意識から考察の手がかりが與えられる以上、具體的な環境と共輓的に意識が形成される學習の問題が心理學方法論の主題とならなければならぬ。G・W・オールポートは、「凡そ學習の法則は同時に又人格の發達の法則でもある。さて今度、學習心理學に於ける主要問題は何かと言へば、その一つは練習の轉移とすることである」と述べてゐる(一、二六二頁)のは、人格の學習論的構造を指摘したものと見えよう。オールポートは更に、人格の體制化の問題を解決しようと欲するならば、先ず「轉移」(transfer)の問題を解決しなければならぬとし、その轉移が「要素の一致」(identical element)の説では明らかにならないことを詳論して後、「斯くして、轉移の効果は、個人が當面するところの場の意味が個人にとつて等價であるということに主として依存するものであつて、場が同一の時に轉移が起るのである」と言つてゐる(一、二八五頁)。斯様にして我々是我々の出會う刺激・環境の度毎に學習効果の轉移を行うことによつて生物的・社會的な適應行動を續けてゐるものと解釋される。

我々の日常生活に於ては様々な道具が夫々の命名語によつて呼ばれてゐる。例えば「机」はその上で書物を読み文字を書くものとして使用されるのが普通であつて、謂わゆる「机」なる客觀的實在物が「机」と呼ばれる。ところが、場合の都合によりそれは「椅子」として用いられんとする時には、それは例えば「この椅子ではだめだ」という様に呼ばれる。命名語は本質的には事物の客觀的性質によつて決定されるものでなく常にそれは、我々の側でのそれ

に對する態度で決定されて來るのである。即ち我々にあつての「意味」が言語の意味となるのである（二十七、第一章、主體的理會理論。一般に、外界刺激に對する我々の側の「意味」作用——それは學習效果の轉移として、凡て經驗的に由來をもつものなのであるが——が我々の知覺や行動を規定するものと考えられる。故に、謂わゆる「心構え」(Einstellung)の異りは「見え」や「聞え」の世界の異りを、よし客觀的刺戟が同一の場合でも、現象せしめる。これは學習論的に主體的意識が變容した場合、即ち見「慣れ」によつて「見え」の世界が變容する場合にも同様に言ひ得ることである（二十七、第二章、知覺理論に於ける主體性原理）。我々の生活に於ては特定の事物は單にその様な事物でなしに、常にそれは「押すもの」とか「握るもの」とかいう様に行動を要求して迫るものであるということは、知覺の世界が學習論的に形成された意識に對して相對的に、謂わば「行動的構造」をもつのである（三十、(一)、知覺世界の行動的構造）。換言すれば行動の「場」の場合にあつてと同様、知覺の「場」のプレゲナンツも學習論的機制をもつていることが結論されるのである。

最初に述べた如く、我々は、科學の立場は何處までも實在主義でなければならぬとする。即ち、我々の意識の外の世界に、可知的なる客觀的實在を想定する立場である。従つて環境という語は我々にあつては何處までもこの客觀的實在に外ならない、寧ろ一義的に客觀的實在でなければならぬ。従つてK・ユンカが「行動的環境」(behavioral environment)と呼んだものはこの様な客觀的實在ではないのであつて、それは單に我々の意識にこの客觀的實在が反映した現象面にすぎない。レーニンの語を借りれば、「我々のための物」に轉化したのである。彼は言う、「唯物論はフェノメーン（現象、吾々のためのもの）の背後に、吾々の外部にある實在を見る」(十九、上、一六七頁)とか、「現象」は「吾々のためのもの」であり、又「客體自體」の寫しである(十九、上、一六五頁)とかと。「吾々のためのもの」という語はその様な語法に於て到る所に使用されているが、これは要するに、學習論的に經驗を背負つてゐる意欲としての意識が、意識の外なる「物自體」に觸れる時、學習效果の轉移としてレーニンの謂わゆる「吾々の

ためのものへの轉化が起る事實を言うのである。我々の意欲的意識はこの様に、外界の環境（客觀的實在）に觸れた場合に、現に知覺されている様に知覺しようとする「用意（readiness）を、學習論的に形成し來つていると考へねばならない。それ故、人間と外界との何もかもを包んだ「心理學的場」とか「生活空間」とかいうものを考へることとはよいとしても、その様な論理的に考へられたところの力系的全體は學習論的構造をもつたものとして、逆に意識の構造から明らかにされるのでなかつたら、それは一つのテロスを希求する空虚な全體となるであらう。そして、その様な全體としての心理學的場を考えればこそ、「心理學的に言へば、行動は心理學的場の中に於て起るものとして最もよく記述される」とか、「何時であれ、一個の有機體が心理學的に行動する場合には、それは心理學的場の中に於て行動していると言われ得る」（四、八〇頁—八一頁。傍點は筆者）とか言へて來るのである。斯様にして、レヴィンのよく引用される $B = f(PE)$ にあつても、 E は何處までも我々にあつては「物自體」乃至「客觀的實在」であると考えねばならないのにひきかえて、レヴィンにあつては「場」即ち「生活空間」の中にあつて何らかの（マイナスかプラスかの）「誘意性」をもつたものとされて來る。實はこの「誘意性」とは「我々のためのもの」に外ならないのである。

西田哲學に於ける根本概念である「場所」とか「歴史的世界」とか「ポイエシスの世界」とか「行爲的直觀」とかの諸概念の指示するものが、**反省された意識面に外ならない**ということは、それらの諸概念が西田哲學發祥の頃の「純粹經驗」と異名にして同一なるものであることを知るならば容易に肯定され得よう。意識が唯一の實在であつて、外界の物質の如きものは單に考へられたものにすぎないと證くところの、パークレーを思わせる程の觀念論が「歴史的物质は表現的である」とか「歴史的空間はヴェクトル的である」とかと述べているところは、レヴィンが「環境が誘意性をもつ」とか「場がヴェクトル的である」とする論理と符節を合す如くであり、現に西田哲學の側からしてレヴィンの考へが積極的に肯定されることとなつてゐる（十八、特に「經驗科學」）。斯様な事實は、逆に、「場」の構造と呼ばれるものが

反省された意識の構造から考えられたものにすぎないということ物語るものであると同時に、謂わゆる全體主義なるものが一般に觀念論の性格を持つものであることを知るのである(三十、四、發生機意識の構造)。それは、何もかもを包んだ全體の「場」の中に、「行動的環境」即ち「我々のためのもの」をまで取り込んで来たからであつて、「場」に於ける環境を何處までも「物自體」乃至「客觀的實在」としなかつたところからなのである。トポロギーが謂わば一つの「機能的關係の地圖」であるとしても、それは逆に却つて意識の構造からして論理的に構成され得るものなのである。

後に觸れるであろう如く、實在論の立場と實證主義の立場とは、科學哲學に於ての二つの相容れない立場であると思われ、前者が唯物論的態度、即ち、意識の外に客觀的實在を認め且つこれを可知的とする態度をもつて反して、後者は何處までも主觀的な「經驗」即ち意識面の内側にのみ閉じこもり、意識の外に客觀的實在があることを認めず、或はこれを結局不可知のものとする觀念論的態度を採るのである。レーニンらがマツハ主義を攻撃するのは、實證主義にまつるところの、この觀念論と不可知論であるということは今更述べるまでもない。マツハが物質とは感覺複合に外ならぬと言ひ、アヴェナリウスが物理學と心理學との相違は單に見方の相違にすぎぬと言ふのは、凡て外界の客觀的實在の想定を認めないからで、その様な態度から來るところの、アヴェナリウスの謂わゆる「原理的同格」乃至「完全經驗」がレヴィンの謂わゆる「場」乃至「生活空間」に符合するといふことは興味ある問題である。アヴェナリウスは「心理學の對象の概念」についての記要に於て(十九、(上)中)、我と環境とは不可分ののであつて、環境は對偶項(Gegenglied)に外ならずとし、我と環境とは共に「つねに一緒に見出されるもの(Gemein ein Zusammengehulenes)」であると云う。この様な「原理的同格」は明らかにレヴィンの「場」でもあつた。何となれば力系的全體性としての「場」の力學的構造と謂われるものがこの様な性質のものであつたからである。ここでは、對偶項の獨立性は認められていず、「場」の中の環境は既に「意識」の息吹きのかかつてゐる「行動的環境」であつて、客觀的實在でも「物自體」でもなかつた。地球に於ける人間の發生以前に「物自體」が存在したことを認めるなら

ば、對偶項の獨立性は認めなければならぬ。我々が發に、意識が刺戟と共、輓的に學習論的に形成されると言つたのは、人間の側からのことにすぎない。アヴェナリウスがこの様な、我と環境との分たれない世界を又「完全經驗」と呼んでいるところは、直ぐにレヴィンの「生活空間」を想起せしめるものがある。レーニンの言う如く、「完全經驗」内に於ては、既に「物自體」としての物質は存在しないのである、換言すれば西田哲學に謂われた「歴史的物質」だけが存在するのである。一體、「完全經驗」と謂われる如く、それは既に意識面のことから外ならないのである。ホルデインの holism が生體と環境とは境界なしに不可分であると言つたり、ベルクランフイーの organismism が生體と環境とが不可分的に動的平衡を保つと言つたりする様に、一般に全體主義に見られる全體概念の觀念論的性格を、我々は力系的全體としての「心理學的場」にも見出すことが出来る様に思われる。

「かたやろうと思ふ念を人々生じませねど、向うより来る人に自然と行當りもせず、人につき倒されもせず、ふまれもせず……自由に道のあるきますわいの。……足下には一足一足に分別の念を生じてあるきはしませぬ。されども自然にあるくは、不生であるくと云う物で御さるわいの」という様な二十三、七三頁）體驗の表白は如何にも「場」の力から行動が適應的に結果する情景を畫いて妙であるが、しかしこの様な境地は學習の擧句の「慣れ」に於ける無意識性を言うので（二十九、（純粹意味の構造と形成、及び三十一）あつて、既にも述べた如く、若し獲得形質としての學習効果より以前のものとして行動を可能ならしめるものがあるならば、それは種に於ける獲得形質（學習効果）の遺傳されたものと考へなければならぬ。恰も精神分析學にあつて、「エス (Es, Id) は凡ゆる系統發生的な推積物を包含する。即ち、それは種の進化の記録を留めているのである」と言われる（五、二九頁）如くにである。「場」は斯くして何處までもアボスマリオリの構造を帯つたものと考えられるのである。

四 科學哲學の問題

凡そ科學の立場は、認識主體としての科學者の「意識」の外なる何らかの客觀的實在についての知識の體系を目指すものでなければならぬ。ところが凡ての科學がその方法論上、科學者自身の主觀的な「經驗」を媒介しなければならぬという點で「經驗科學」と呼ばれることはよいが、謂われるところの「經驗」とは客觀的實在が我々の意識面に反映したものであり、「我々のためのもの」へ轉化した後に外ならぬが故に、科學者は常に自らの「經驗」の背後に客觀的實在の想定を忘れることは許されない。ところが個別的經驗科學が或る渡達段階に到達すると、自らの科學の成立の根柢の問題を問題としたり、自らの用いる方法が吟味されたりして、謂わば自己批判的となつて來るのである。個別科學毎に見るならば、夫々の個別科學にあつてこの様な問題領域を問題とするのは、言うまでもなく「理論個別科學」である。例えば、理論物理学や理論生物学や理論心理学はその様な領域として位する。そして理論個別科學全體の謂わば總元縮の位置に「科學哲學」(Philosophy of Science)が來るのであるが、これは又、「科學理論」(Wissenschaftstheorie)とも呼ばれる。A・C・ベンヂャミンは、この様な科學哲學の内容をその「科學哲學概論」の中で次の様に分類している。即ち(二、一四八頁)。

A 實證主義

1 嚴密經驗主義——ミル、マッハ、ピアスン

2 操作主義——ブリッヂマン

B 變容された實證主義

1 構成主義——ラッセル、ホブソン

2 規約主義——ファイヒンガー、ポアンカレ

3 論理的實證主義——シュニリク、ウイトゲンシュタイン、カルナプ

C 實在主義

理論心理学に於ける常識の問題

科學的實在主義——プランク、マイヤースン、ホワイトヘッド、バグインクがそれである。ここに我々は科學哲學の立場が結局のところ實證主義と實在主義の二つとされてゐることを見るのであるが、實在主義の方に屬せしむべきものとしては其他に

辯證法的唯物論——マルクス、エンゲルス、レーニン

を挙げなければならぬであらう。そして、この様な二つの陣營は既にも觸れた如く、結局、觀念論と唯物論、不可知論と可知論の相對立する立場を前提してゐるものと考へられる。ここに於て、科學は「意識」の外なる客觀的實在についての研究であると定義される立場と、科學とは感覺間や表象間の連絡の法則を見出す研究であるという謂わゆるマツハ主義の流儀の立場とが分たれて來よう。論理的實證主義に屬するR・カルナプはその「科學論理學の課題」に於て(二十二)、科學の種々な領域にあつての概念・命題・證明・理論は論理學の觀點の下に解剖せられるべく、この様な研究領域に對する總括的な名稱として科學論理學という名稱が與えられるとし、その様な論理學は、形而上學とは逆に、一般に物に就いては關心を持たぬと言ふ。凡ゆる點に於て、ウイーン學團の哲學は、コントによりも寧ろヒュームに最も近く由來するとされる(二十五、三頁)が、それは科學論理學にあつて見られるところのヒュームのな懷疑的實證主義の故であらう。科學論理學に於て謂われるところのプロトルコ命題の基礎をなす直接經驗は何らかの意味に於て形而上學的存在たる、意識の外なる「物自體」乃至「客觀的存在」によつて起されたものに外ならない。科學はその様な實在を想定することから出發する諸理論を持ち、理論を實踐によつて檢證することによつて *adhaerentia* へと接近して行けるのである。同一の「物自體」の意識に於ける反映の仕方、即ち「我々」のためのものへの轉化の仕方との相違こそは、意識の背負つてゐるところの學習效果に依存するものなので、科學が常識の持ち合はさない技術を所有するということは、科學者の意識にあつては「物自體」一般に外界への反映の仕方、より多く、或はより深く、我々のためのもの「たらしめ得るだけに、學習論的な形成が行われているからに外ならない。そして科學的技術の成功

は何よりも先ず、客觀的實在と科學者の知性との間より多くの *incommensurable* を意味するのである。斯うしたところに可知論の科學哲學の態度が見出されるのである。「對象の優位」を認める科學理論の立場がこれである。

經驗科學としての心理學は如何なる科學であるか。マツハによれば、心理學は表象間の連絡の法則を確めることがその任務であり、物理學は感覺間の連絡の法則を見出すことをその任務とするとされる。斯様なマツハ主義にあつて最も事缺けているものは外界實在の想定である。我々にあつては、心理學は客觀的實在としての「意味」の學であるとされる。それは單に意識の學でもなく、又、單に肉體への行動、の學でもない。その様な二元論的契機以前に於て人間を把えんとすることこそ心理學の任務でなければならぬ。マツハ主義に對して系統的に戰つたルードウィヒ・ボルトマンが、物質とは感覺の複合であると言ふものに對しては、そうすれば他人も亦諸の感覺の複合にすぎなくなることを指摘した様に、N・ハルトマンの謂わゆる「眞直ぐの志向」(*inkantio recta*)の態度を缺く科學哲學の立場には、到る所に觀念論的誤謬が露わにされるのである。科學が科學者の意識の外なる客觀的實在を取扱ふものである限り、心理學者は他人の「意味」を研究しなければならぬ。行動主義心理學者ワトソンが、他人の意識面を無視して單に行動のみを取扱ふことを宣言した時、それは極めて粗雑な實證主義であつたと言わねばならぬ。他人の行動と考えられたものが心理學者の感覺に與えられる唯一の「所興」だからと言ふ點は、統一科學派の方法がこの「所興」(プロトルコル命題)から出發してトウトロギーを繰返すこと以外にする仕方がないとする考え方と相通じている。心理學が好んで謂わゆる客觀的行動という様なもののみを追つて行くと、謂わば單に行動の「型」(*Pattern*)乃至「文脈」(*Context*)の如きものだけが抽出され、行動の「意味」性や「意味」の層位性、文脈と層位については二十九)が容易に見失われるのである。子供が帯を手にして掃除の行動をしている、ということだけが客觀的行動として把えられれば、それは「型」乃至「文脈」である。しかし、たとえ型と文脈が同一でも、その行動のモチイベイション即ち内在目的的な意欲性は様々な場合があり得る。見栄や見せびらかしや衒いから行われているか、本當に自ら掃除の必要

を感じて行つてゐるか、という様な「意味」性は、單に客觀的行動の追求だけからでは明らかにし難い。心理學が「意味」の學であるという認識を忘れるところに行動主義の粗笨性と似而非なる科學性が宿るのである。よく謂われる「追試可能性」ということも、單に操作主義的に實驗者の側の「經驗」の内側だけから「型」や「文脈」の同一で満足してゐると、凡そ全然「意味」の違つた行動を同一の行動として見てとる危険なしとしない。それは「方法の優位」を説く操作主義や行動主義の根柢に存在するマツマ主義・現象主義から由來するとこの危険なのである。科學が外なる實在についての知識であるということが、實證主義からは忘れられ勝ちになるのであつて、この様なところに實證主義が觀念論の立場であることを最もよく露わにするのである。西田哲學が晩年に「徹底的實證主義」であると同稱したことは寧ろ當然であらう。ワトソニズムに端を發して、最近ではトールマンらの、特にハルの行動理論が代表する如き「行動科學」(Behavioral science)乃至「行動學」(Behavioristics)にまで發展してゐる新行動主義にあつても、若し行動學なるものが、嘗てワトソンが言つた様に、他人の意識の如きものは直接觀察不可能である、客觀的に「經驗」に「所與」として與えられるものは行動だけである、それ故行動だけを研究すればよい、という風な態度をとるのであれば、取扱われる行動がよし分子的・微視的行動から團塊的・巨視的行動に變つたところで、そこでは猶「意味」が「意味」から理解されてゐるのではなく、「意味」の文脈乃至型が問題とされてゐるにすぎない。行動が「意味」から理解されるためには、それが「意欲」の底から理解されることが必要なのである。心理學が單に客觀的行動という様なもののみを追求するのであれば、それは單に何處までも行動の學であるに留まり、人間の學であることは出來ないであらう。若し心理學が人間という「意味」的存在の學であることを欲するのであれば、その様な存在の單に一契機だけを對象とすることで満足してはならない。よき行動主義は單に「公的た操作」に訴えられる謂わゆる公的行動のみ問題とすることなく、「私的な經驗」をも亦言葉を通じて對象とすると謂われるが、それならば行動主義と名乗ることは矛盾である。凡ての個別科學の中で、特に心理學がその對象論という點で大

きい負擔を擔つてゐるのは、右の様に公的行動と私的經驗との全一像（即ち、「意味」）としての人間という客觀的實在を、その對象として持つてゐるところにあるのである。假りにも私的經驗（即ち、意識）が直接觀察され得ないという理由で行動主義へ回避するならば、それは科學に對する逆行であると言わねばならぬ。その上、これら公的と私的との兩世界の連なりは、我々が最初に論じた如く、認識者の認識の論理的性癖のために常に二元論的な把握のされ方をする傾きがあるのである。我々が人間の具體的存在像を「意味」として考へたのは、斯様な論理の性癖から脱するためなのであつた。斯くして我々の立場からしては、心理學は「意味實在論」とでも呼ばれ得よう。

P・W・ブリッヂマンが「一般的に見て、我々は概念によつては一組の操作以上の何ものをも意味しない。概念はそれに對應する操作の組合せと同義的である」（三、五頁）と語つて「操作」(operation) というものに注意を惹いたことは大いに意義のあることであつた。そこでは「人間」という概念も、客觀的實在としての人間を指示するものでは既にないのである。ブリッヂマンの操作主義を一層發展せしめるについては心理學者達が貢獻しているが、一般に操作主義にあつては、操作が對向する對象としての、操作者の意識の外なる客觀的實在が缺けてゐるという點で、それは觀念論的・實證主義的である。この點では、P・クリスマン（六）やC・O・ウェーバー（二十四）が操作の彼方の實在が缺けてゐることを指摘するのは尤もである。主觀の側の「經驗」の内部で或はこちら側で操作や言葉の論理を問題とする實證主義という點で、明らかに操作主義と論理的實證主義とは相通じる主張をもつてゐる。これらの主張からしては、科學は科學者の意識の外なる客觀的實在を研究するものと定義することも出來ず、又、諸科學がその對象とする客觀的實在の種類や領域によつて命名されたり區別されたりすることは無意味である。その様な處に「統一語」による「統一科學」という如き主張も可能となるのであるが、主觀の側の「經驗」は認め乍ら、他人の客觀的存在は認めないという様な觀念論的の立場の科學理論に何を期待することが出来るか。それは單に科學方法論上の「注意書き」の位置以上のものを與へることは困難であらう。「方法の優位」（乃至「方法の獨裁」）か、「對象の優

位」か。科學の態度は何處までも“intentional object”になければならぬ。

(完)

文 獻

- (一) Allport, G. W., *Personality: A Psychological Interpretation*, 1938.
- (二) Benjamin, A. C., *An Introduction to the Philosophy of Science*, 1937.
- (三) Bridgman, P. W., *Logic of Modern Physics*, 1927.
- (四) Brown, J. F., *On the Use of Mathematics in Psychological Theory*, *Psychometrika*, Vol. I, No. 1, 1936.
- (五) Crichton-Miller, H., *Psycho analysis and its Derivatives*, 1923.
- (六) Crissman, P., *Operational Definition of Concepts*, *Psychol. Rev.*, 46, 1939.
- (七) ハルトマン (Hartmann, N.), *存在論の基礎附け* (高橋敬視譯)、昭和十七年。
- (八) 木田文夫、*遺傳體質學*、昭和二十三年。
- (九) 木田文夫、*生命科學における内部相互關係論*、*思想*、二八五號、昭和二十三年。
- (十) Koffka, K., *Psychologie* (中村克己、眞値と思考、昭和十四年、八十八頁による)。
- (十一) Köhler, W., *The Place of Value in a World of Facts*, 1938.
- (十二) Lewin, K., *The Conflict between Aristotelian and Galtician Modes of Thought in Contemporary Psychology* (A Dynamic Theory of Personality, Chap. I) 1935.
- (十三) 正木正、*人間知について——質存的人間の心理學の道——*、*心理*、第一冊、昭和二十二年。
- (十四) 松村一人、*辯證法的唯物論の新しき課題について*、*理論*、昭和二十三年、一號。
- (十五) McDougall, W., *Hornic Psychology* (An Introduction to Social Psychology, 22 ed., Supplementary Chap. VII), 1931.
- (十六) McDougall, W., *Fourth Report on a Lamarckian Experiment*, *Brit. J. Psychol.*, 28, 1938.

- (十七) 永田廣志、模寫論の論理學としての唯物辯證法（唯物辯證法講話、附録二）、昭和二十二年。
- (十八) 西田幾多郎、哲學論文集第三、昭和十四年。
- (十九) レーニン(Lenin, N.)、唯物論と經驗批判論（佐野文夫譯）、昭和五年。
- (二十) 柴谷篤弘、理論生物學、昭和二十二年。
- (二十一) 島芳夫、行爲の全體的構造、昭和十八年。
- (二十二) 篠原雄、統一科學論集、昭和十七年。
- (二十三) 鈴木大拙、縁起の不生禪、昭和十五年。
- (二十四) Weber, C. O., Valid and Invalid Conceptions of Operationalism in Psychology, *Psychol. Rev.*, 49, 1942.
- (二十五) Weinberg, J. R., An Examination of Logical Positivism, 1934.
- (二十六) 八杉龍一、ダーウイニズムの諸問題、昭和二十三年。
- (二十七) 上代晃、知覺理論に於ける主體性原理、**哲學雜誌**、五十九卷及び六十一卷、昭和十九年及び二十一年。
- (二十八) 上代晃、意味の實在的構造、**理想**、一七一—一七二號、昭和二十二年。
- (二十九) 上代晃、層位原理に於ける文脈と屬性（理論心理學的考察）、**哲學季刊**、第八號、昭和二十三年。
- (三十) 上代晃、理論心理學の問題、**心理學研究**、二十卷、第一輯、昭和二十四年。
- (三十一) 上代晃、學習理論の根本問題、**心理**、第四冊、昭和二十三年。